

木村尚三郎著「パリ 世界の都市の物語」文春文庫、文藝春秋、1998 年 12 月 10 日刊を読む

本物があるぞという実感－21世紀に向うパリ－

1. パリには、歴史に培われた本物がある。世界の誰にでも通じる本物の人情、本物のサービス、本物の生きる知恵がある。新しいパリを形づくるコミュニケーション、芸術、スポーツ、科学技術、歴史の五本の柱は、現代世界の誰もがもっとも求める価値である。しかも今日はじめて出現したものではなく、一千年の歴史を通して、繰り返し追求され、磨き抜かれてきた価値である。
2. その本物感覚、ここには本物があるぞという実感が、パリを訪れる人の心を素直にする。異邦人でありながら、町の空気を過去の人たちとともに吸い、人間として互いに親しみ合うことができる。歴史が過去のものではなく、親近感をもって現代とともに生き、ともに新しい未来を形づくっていくのだ。ちょうどルイ王朝時代の家具が、凛とした存在感をもって、現代に生きつづけているように。
3. 時代は変る。しかし過去は、そのなかにあって正当に生きつづける。それが、パリに住み合う人びとを安心させる。パリを訪れるとき、人は歴史を実感し、また激しく動きつつある現代を実感する。世界のどの都市よりも、である。そして歴史と現代が、じつは同じものであることを理解する。歴史のない現代はなく、現代のない歴史も意味を持たない。ちょうど舞台装置を欠いた役者がただの人であり、役者を欠いた舞台装置がたんなるガラクタであるように。
4. パリの町はどこでも、一歩あるくたびに新しい景観がひらけ、別の歴史世界がひらかれる。散策に疲れたら、何度もカフェに飛びこもう。どんな繁華街でも、どんな場末でも、ボーイは「ボン・ジュール！」「ボン・ソワール！」と、ニコッと笑顔で迎えるだろう、誰に対しても、分けへだてなく。
5. 見るともなしに通りを見れば、暮れなずむ街中に、パンを抱え買物包みを持った人びとが、小走りに家路を急ぐ。小学校に、幼稚園にわが子を迎えに行った母親たちが、子どもの手を引いて帰っていく。そんな情景を、いくばくかの旅の疲れとともにぼんやりと見てみると、一杯のはずの手にしたビールや赤ワインが、いつしか二杯になる。しだいに陶然として、昼も夜も、パリも日本も、旅人か住人かも、時とともに分ちがたくなっていく。不思議な安堵感とともに。

P313 ～ 314

[コメント]

木村尚三郎先生のパリへの思いがよく伝わってくるエッセイ集。「過去と現代」、つまり「歴史と現代」をどう関係づけて生きていくかを考える上で、パリは最適な街の一つかもしれない。じっくりと読み込みたい。

— 2014 年 2 月 11 日 林 明夫記 —